

Nippon Mystery Series 3

孤独な共犯者 多岐川 恭

早川書房

著者略歴

本名 松尾舜吉 大正9年1月7日生 昭和19年東京大学経済学部卒

現住所 東京都中野区江古田2の52

主著書

「異郷の帆」(新潮社刊)

「静かな教授」(河出書房新社刊)

「お茶とプール」(角川書店刊) 他多数あり

第三回配本

定価二九〇円

孤獨な共犯者

日本ミステリ・シリーズ

第三卷

昭和三七年一月二〇日 印刷
昭和三七年一月三〇日 発行

著者 多岐川 恭

発行者 早川 清

印刷者 堀内文治郎

発行所 早川書房

東京都千代田区神田多町二〇二
電話 東京 〇五七六・二六〇・三六〇
〇五四六・八 (編集)

用紙・四国製紙KK/クロス・日本クロスKK/印刷・KK堀内印刷/製本・堅省堂

孤独な共犯者

目次

病室	五
純子の家	二六
死者	四六
救助の詐術	八〇
偶像とその変容	一〇三
刑事の曳く影	一三四

桃江と秀一	一七
ある教師の死	一七
そそのかし	二〇
わなの中の終局	三五
あとがき	二七

箱・カット 勝呂 忠

病室

部屋のなかは、温室めいた静けさだった。窓から早春の陽ざしがさしこんでいる。鉢植えのゼラニウム、あおいが、その陽をうけて輝いていた。

久米啓也は足の裏の化膿をひどくして、このK外科に入院した。ほかの患者と一緒に病室はいやだと言いつ張ったので、K外科では二つしかない個室に入れてもらった。

手術して一週間経ち、ほとんど膿も出つくし、足のはれも引いた。現在は消毒とほろたいの付け替えだけで、あとは傷口の癒着を待つばかりだから、四、五日もすれば退院できるだろう。

少し高くしてふとんから出し、ほろたいでグルグル巻きにしてある足は、もう痛まない。体の他の箇所は至って健康なので、啓也は病室での一日を持て余していた。

じっと寝ていても、汗ばむほどの温度だ。啓也は一眠りしようとする目を閉じた。

三学期の試験は済ませているので、三年への進級にはさしつかえない。学校はあすあたりから

春の休暇に入るはずだ。

明る過ぎるし、啓也自身が健康過ぎるので、眠れはしない。彼はまた目をあげ、枕元の本を取った。夏目漱石の「草枕」だが、二、三行読むと退屈してしまった。

両親や兄弟が見舞いにやってくるのは、うるさいだけなので、断わっている。

彼は窓辺のゼラニウムに目をすえた。春の新鮮な息吹きが、そこから匂ってくるようだった。ゼラニウムは、彼にすぐ看護婦の前川純子を連想させた。すると、彼の体は熱くなってきた。

前川純子は美しい女と言うのではなかった。しかし、白い服に包まれた体には、若い娘だけが持っている、弾けるような魅力が感じられた。丸顔で、ほとんど化粧をしていないが、頬がふくらんで赤く、陳腐な形容だが、水気の多い果物のようだった。

彼女は高校生の啓也を気易く思っており、さまざまなことを切れ切れに話しかけながら、手早くほうたいを付け替えた。啓也は「女」という未知なものの接触を鋭く感じ、匂いを胸一杯に吸いこむのだったが、彼の昂奮状態は、うまくかくされているはずだった。

前川純子は、午前中に医師に従って一回、午後にもた一回、部屋にやってくるだけである。午前中の分は、診察とほうたいの付け替え、午後は検温と薬を飲ませるためである。もちろん、臨時に来てもらうことはある。これはおもに、手伝ってもらって、便所に行くためだ。三度の食事は、別のおばさんが運んでくる。

純子がくると心が乱れるので、啓也は厭だった。純子を嫌いだと思うことがあったが、一方で

は、彼女を待っているのだった。おれは、本当は純子を待っているのだという自覚が、強くなってきた。

その日、啓也にショックを与えるできごとがあった。

午後三時、純子がいつものように部屋に入った。常よりも彼女を待ちこがれる気持が激しかったせいか、彼は無意識に純子を見つめ、顔を赤くしたらしい。

「どうしたの？」

と言った純子は、不意に年を取った女のような、分別くさい表情をした。

「何よあんな。子供のくせに……」

彼女はそう言うと、こんどは非常にみにくい笑顔をした。ニキビの手当をしたのか、頬っぺたにはってある、豆粒ほどの絆創膏が啓也を刺激した。

純子はどういうつもりか、ベッドに体を押しつけるようにして、啓也をからかうようにのぞきこんだ。女の二つの丸い脚が、脇腹に感じられた。

啓也は衝動的に手を回し、純子の腰を抱いて引き寄せた。頭は燃えるようで、理性はどこかへケシ飛んでいる。

純子は重い体で、啓也のベッドにかぶさってきた。ククク、と女ののどの奥から笑いが洩れ、顔が近付いてきた。彼は女の鼻孔がひろがっているのを見た。

純子はしばらく唇で啓也の額をもてあそんでから、体を起し、疲れた様子で窓のカーテンをし

めに行った。

カーテンが引かれると、病室は薄暗く、落ち着いた空気になった。

啓也は自慰を知っていたが、毛布の下から手を入れた純子の愛撫は、同じようなものでありながら、むしろ性行為そのものと言ってよかった。啓也にとって、少くともそうだった。それは一方で純子が、上から啓也を抱きしめるようにし、右手で彼の首を巻いていたせいかもしれない。

啓也は無抵抗で、純子に体をまかせていた。はずかしさ、屈辱感、自己嫌悪、純子への理由のない憎悪、それから愛着……そういう、モヤモヤした感情が、胸の中で渦をまいている。しかし、それよりも、経験の新らしさが、彼を全く受動的にしているのだった。彼は体を開き、純子の衣服の下の女体を味わっていた。

みだらな遊びはすぐに終わった。純子はそっけない顔で、事務的に後始末をしてくれ、毛布をかけ直してくれた。

純子が何食わぬ顔で出て行ったあと、啓也は夕方まで身動きもせずに行った。

その遊びは、それから毎日続けられた。彼は着物の上から純子を抱くだけだったが、四日目の夜に、純潔を失なうことになった。

「今晚、来てあげるわ」

と純子は、午後の検温の時には何もせず、熱っぽい目つきを言った。

「そろそろあんたも、退院でしょう？　だからさ。あんた、あたしが欲しいんでしょ？　坊

や、女を知らないのね？」

啓也は黙っていた。これまでの愛撫と、実際の性行為との間に、それほどの違いがあるとは思えない。行くところまで行けばいいのだ。十七歳で童貞が失なわれるということも、大したことではない。

どうして医師や同僚をごまかしたのか、純子は九時過ぎにやってきた。見慣れた看護婦の服装ではなく、どこでも見かけられる若い娘の姿だった。化粧が濃く、口紅がクッキリと赤い。

彼女は急いでいるのだと言い、申しわけに持参したらしい甘栗とクッキーの袋をベッド横のテーブルに置くと、手早く上衣とスカートを脱ぎ、シャツも、スカートの下にはいていた腹巻の長いようなものも脱ぎ、シュミーズ一枚になって、啓也のベッドにもぐりこんできた。

おとなしい童貞の少年と、犯す形で交わることの目新らしさが、彼女を一方ならず興がらせ、昂奮させているのだった。

足を自由に動かさないせいもあり、啓也は相変らずされるままになった。激しい欲情と陶醉があったが、底に冷たいものが流れている。啓也は女のあらゆる動きと肢体を、澄んだ目で眺め、やわらかい、べたついた接触を、全身で鋭敏に捕えていた。

彼の体が、女の内部に溶けこんだと感じた一瞬、啓也は身ぶるいしそうになった。それはなま暖かく、暗い、よごれた淵にひきずりこまれるような感触だった。

一方で狂気のように女にしがみつきながら、一方では啓也の心は冷えていった。純子が欲情の

波のなかで荒々しくなればなるほど、彼は女の体そのものをうとましく感じだしているのだった。

純子は啓也の胸に顔を押しつけて声を殺し、しばらくあえぎながら休んだ。それからろろと体を起し、ならんで横になった。

何も話すことはなく、啓也の心はとくに醒めていた。純子がなおもささやきかけたり、体を撫でてくれたり、肢を投げかけてきたりするのは、不快だった。口の中にあるのは、早く行ってくれという言葉だけだった。

純子は啓也に、ほどこしでもしてやったつもりらしく、起き上って服を着ると、まるで年増女のような心やりと優越感を見せて、何やかやしゃべった。啓也はそれをほとんど聞いていなかった。

純子が出て行ったあと、彼はしばらくウトウトした。夜中にまた目がさめた。

奇妙なことに、最初に頭に浮かんだのは、おれは童貞を失なったのだという考えだった。奇妙だというのは啓也には童貞などといった観念は意味がなかったからだ。

しかし、それは観念ではなかった。たしかに童貞があり、それが失なわれたことを、啓也は実感で知った。何か清浄で貴重なものが、自分から奪い去られた……子宮の洗礼によって、である。

身勝手なばかばかしい考えのようだが、どうにもならなかった。純子のすべての表情、姿態、

動作、甘いささやきなどが、なまなましくよみがえってきた。それは要約すれば、あのなま暖かい接触の魅力といやらしさだった。

「退院しても構わないが、ついでだから、もう二、三日いるか」

と医師が言った。病院に来た母の秋子に、啓也はそれを伝えた。

「だけど、個室はもういやだ。共同のところでもいいよ」

「そりゃ、そうしたほうが助かるけど」

秋子は不審そうに言った。

「どうしていやになったの？ 入院する時は、あんなに頑張ったのに……」

「退屈だからさ」

と啓也は答えただけだった。秋子はそれで納得したようだった。彼は母に対して、暗い秘密を持っていたわけだった。品行がよく、おとなしく、まず優等生で通っている啓也が、看護婦によって女の肌を知った……つまり一人前の男になったのだとは、話したところで、母は容易に信じないだろう。

啓也は、自分が一晩で老成した大人に変わったように思った。大人のみにくさを、純子によって、体じゅうに塗りとくられてしまったという感じだった。

「なぜここを出るの？ あたしが怖くなったの？」

と、純子は肩を貸しながら、啓也に聞いた。

「入院費がもったいないからさ」

と啓也は答え、純子の与えてくれている体に暗い欲望を感じていた。

「いいの、あんた？ もうあんなこと、できないわよ」

純子の髪は女の匂いがした。彼女は啓也よりもかなり背が低かった。

「退院してから、会ってくれるだろう？」

とささやきながら、啓也は純子に殺意のようなものを抱いた。彼女は意識して肉付きのいい体を啓也に押しつけており、それは啓也を目がくらむほど刺激すると同時に、憎悪を呼び起すのだった。

「どうだかね。むずかしいわね」

と、じらすように純子は言った。

その連れて行かれた病室には、ベッドが三つあった。病室の様子は陰気で不潔だった。

窓辺に近いところに、痔の手術をした男が寝ていた。髪が長い、若い男で、枕元にトランジスタラジオを置き、絶えずオヤキやピーナツをかじっていた。

その隣り、真中のベッドには、脇腹を負傷したという男が、棒のように寝ていた。頭髪を短かく刈り上げた丸顔で、頬から顎、鼻の下にうっすらと不精ひげを生やしていた。陰鬱な目が天井に向けられ、動かなかった。老けて見えるが、啓也よりそれほど年は多くないと思われた。

ドアに近いベッドが、啓也のものだった。

純子は甲斐甲斐しく、啓也が横になるのを手伝ったが、同室の二人の患者の目を意識している
せいか、動作にシナをつけていた。

「もういいよ」

と、啓也は怒った調子で言った。

「ねえ、隣りの人、気味が悪いわ。あたしたちをじっと睨みつけてるの」

と純子が小声で言った。たしかに、陰鬱でけだものめいた目が、こちらに向けられていた。その男が、啓也や、彼にまつわり付くようにしている純子をどう思っているのか、向けられた目ではわからなかった。

純子が出て行くと、その男はまた天井に目を向けた。

その病室では、少なくとも二人の同室患者を観察するという、退屈しのぎがあった。

窓ぎわの男は、週刊誌をひろげてはほうり投げ、ラジオをかけてはスイッチを切り、その間に
ピーナツをかじり、鼻歌をうなるといふ方法を単調にくり返していた。時に、隣りの男のほうを
見やるのだが、こちらの男は相変らずブスリしていて、取りつく島がないようだった。

この落着きのない男の唯一のなぐさめは、家族や知人の見舞いだった。必らずだれかが見舞い
にやってくる。若い女のこともあり、友人らしい男のこともあり、母親のこともある。はげ口を
見つけたように、彼はベラベラとしゃべりだした。結婚前のサラリーマンらしかった。

隣りのベッドの男は、別にうるさそうな様子も見せなかったが、お菓子などを差し出されてもそっぽを向いていた。おそろしく無愛想な男だった。

「あなたは、どこが悪いんですか？」

と、啓也は夜になって初めて、男に話しかけた。男は目だけを向け、しばらく疑い深そうに啓也を眺めていた。

「腹をやられたんだ」

男はやや不明瞭な声で答えた。

「そうですか」

と啓也は言ったが、腹をやられたとは、どういうことかわからなかった。重ねて聞くのは、この男を怒らせそうだった。

「お前はどうしたんだ」

こんどは男が聞いてきた。

「右足の裏が化膿したんです。ほっといたもんだから、ひどくなって……」

「学校か？」

「ええ。雄心高校です。こんど三年になるんです」

「そうか。おれも雄心だ」

男はちょっと目で笑った。よく見ると、邪気のない目だった。空虚なほどの明るさがある。こ